

信濃教育

巻頭言

ゆずりあいの道

以前お世話になった学校は、校庭の南側に線路が走っており、その線路に沿って人が一人歩くのがやっとなという、細い舗装道があった。朝は駅に向かう人、夕は家路を急ぐ人が利用する道である。その道は「ゆずりあいの道」と名付けられていた。誰が名付けたかは知らないが何とも素敵な名前だ。一人が歩くだけの幅しかないのに、行き違いをしたり、追いついたりするのに、互いにゆずりあう必要があるからだろうか。

利便性や効率性を考えれば、倍ぐらいの幅にした方がいいだろう。しかし、そうすることに よってゆずりあうことはなくなってしまう。便利さを求めるのは人間の欲であるが、それを追究するあまり、ゆずりあうという人間の持つ素敵な心を失っていくとしたら、何とも寂しい話である。時として利便さや効率のよさは、人間の持つ温かい心を削ってしまふことがあるように思う。足りないものがあるから、不便さがあるから、人は許し合い、支え合うのかもしれない。

私は、生徒の皆さんが清掃をする時間などに、校舎外を一周見回ったのだが、時々ゆずりあいの道を歩いてゴミを拾っていた。ゆずりあいの道には、ふさわしい環境が必要だと思ったのである。しかし、不思議とゆずりあいの道にはゴミが少なかったように記憶している。また、ゆずりあいの道では、道をゆずる人は「お先にどうぞ」、ゆずってもらった人は「ありがとうございます」などの声が、自然に交わされていた。人が一人しか通ることができないという不便な道では、温かな人の心が飛び交っていたのである。

私はこの話を卒業文集に書いたが、自分ではすっかり忘れていた。二十年近く前に書いた話である。ところが先日、ある卒業生がこの話をスマホに入れて時々読んでいると話してくれた。学級担任でも教科担任でもない私の文章を大事にしてくれているという。ありがたいことである。